

日本軍政下のジャワにおける歌曲募集 —《八重潮》の成立に着目して—

丸山 彩

(立命館大学非常勤講師)

織田 康孝

(立命館大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

序

1942年3月、日本軍はジャワ島の占領を開始し、1945年の終戦時まで当地では軍政が敷かれることとなる。当時、ジャワ島は第十六軍によって管轄され、同軍は現地住民の教化の手段として新聞や雑誌、映画といったメディアを用いた¹⁾。それらは、単にニュースの報道、娯楽といった目的のみならず、人民教化の手段としての音楽を発信する媒体としても機能していた。音楽もまた雑誌や映画と同様に、人民統治の手段としての役割を担っていったのであった²⁾。このように、日本軍政下におけるジャワにおいて展開された宣伝・宣撫工作の道具としての歌を題材として扱った研究は、ほとんど見当たらない³⁾。そこで、本稿では、グラフ雑誌『*Djawa Baroe* ジャワ・バル』によって、多くの歌が発信されていく前史として、日本軍政下のジャワにおいて現地の住民たちに歌われた歌《八重潮》の成立過程に着目したい。

《八重潮》は、公募によって新作された歌曲である。本稿では、歌詞が募集された1942年6月より、《八重潮》が実際に歌われた翌年にかけて、同曲の成立過程と普及について見ていく。戦時期の楽曲募集については、近年では、内地における状況を詳細に明らかにした戸ノ下達也の研究がある⁴⁾。また、新聞社をはじめとするメディアと歌曲募集の関わりについても、従来の研究において指摘されてきた⁵⁾。それらの先行研究を踏まえ、本稿では、《八重潮》を通して、日本軍政下のジャワにおける歌曲制作の一端を明らかにしたい。なお、『うなばら』紙における「八重潮」の表記は「八重汐」「八重潮」の2通りが見られる。本稿では史料の引用を除き、後述する映画のタイトルにも使用された「八重潮」の表記を用いることとする。

1. 史料概要

本稿では、以下の4点の新聞・雑誌を主な史料とし

て用いる。

①『うなばら』⁶⁾

「大東亜共栄圏」構想の名の下、日本が支配下に組み込んでいった東南アジアの諸地域において、初の本格的な日刊紙として刊行されたのが『赤道報』である。1942年3月9日に刊行された『赤道報』は、同年同月26日に『赤道報壁新聞』、続いて翌月3日には『うなばら』と改称された。『うなばら』は同年12月6日まで第十六軍宣伝班によって刊行されており、発行部数は2,000部であった⁷⁾。なお、本研究では後藤乾一・木村一信による復刻版を用いた⁸⁾。

②『ジャワ新聞』

1942年12月6日に刊行を終えた『うなばら』の後継紙ともいえるのが、同年同月8日に創刊した『ジャワ新聞』である。このとき、新聞経営権が宣伝班よりジャワ新聞社に移管された⁹⁾。同紙は『うなばら』と同じく邦字日刊紙であり、創刊から約一年半は、『赤道報』『うなばら』両紙のもっていた文化的色彩の濃い側面を受け継いだ¹⁰⁾。発行部数は9,325部である¹¹⁾。本研究では、木村一信による復刻版を用いた¹²⁾。

③Asia Raya

宣伝班および現地のスタッフ¹³⁾によって、1942年4月29日に創刊されたのが、現地語新聞のAsia Rayaである。タイトルのAsia Rayaは「大アジア」を意味する。創刊当初は宣伝班、ジャワ新聞社設立後は朝日新聞社の主導により刊行された。創刊号から1943年2月まで4面構成(1面が戦局、世界情勢、施策の告知、論説、2面がジャワ島内の記事、3・4面が文化面)、1943年3月2日より2面構成(1面が、戦局、世界情勢、施策の告知、論説、2面がジャワ島内の記事、文化面)となっている。当時の現地語新聞の中では中央紙に位置付けられ、発行部数は20,000部であった¹⁴⁾。本紙は日本国内では唯一、京都大学東南アジア研究所図書室にマイクロフィルムで所蔵されている¹⁵⁾。本稿では以下、『アジア・ラヤ』と表記する。

④ *Djawa Baroe*

ジャワ新聞社が発行したグラフ雑誌 *Djawa Baroe* は、現地語・日本語の両言語が使用されている。タイトルの *Djawa Baroe* は、「新ジャワ」を意味する。本誌は1943年1月1日より1945年8月1日まで月2回、計63号刊行され、発行部数は2,000部程度であった¹⁶⁾。写真を多用している点から、当時識字率が低かったジャワにおいて、幅広い層に読まれていたと推察される。さらに、同誌には人民統治の手段と考えられる歌が多数掲載されていた¹⁷⁾。なお、同誌は龍溪書舎より復刻版が刊行されている¹⁸⁾。本稿では以下、『ジャワ・バル』と表記する。

2. 戦時期の歌曲募集

戦時期には、国民意識の昂揚を図る手段として、音楽作品の募集が数多く行われた。また、音楽作品の募集はメディア・イベントという性格を併せ持つものであった¹⁹⁾。それは、新聞社が積極的に楽曲募集を展開していることからもうかがえる。募集のスタイルとしては、作詞・作曲ともに公募する場合と、作詞を公募し作曲は主催者によって委嘱される場合があった²⁰⁾。1942年にジャワに進出した朝日新聞社は、内地において積極的に歌曲募集を展開していた。本節では、朝日新聞社が内地において実施した歌曲募集を中心に、当時の歌曲募集について概観したい。なお、本節は、主に戸ノ下達也『「国民歌」を唱和した時代 昭和の大衆歌謡』を参考にまとめた。

早い時期の楽曲募集としては、朝日新聞社の「肉弾三勇士の歌」と毎日新聞社の「爆弾三勇士の歌」が挙げられる。これらは、第一次上海事変勃発後の1932年2月22日、廟行鎮で自ら爆死した3名の工兵を讃える歌を制作するための懸賞であった²¹⁾。1937年11月、朝日新聞社は「皇軍大捷の歌」歌詞懸賞募集を発表した²²⁾。同年12月19日には「皇軍大捷の歌」の当選作品として、35,991編の中から福田米次郎の作品入選と5つの佳作作品が発表された。作曲は堀内敬三に委嘱され、同月23日には《皇軍大捷の歌》として、ピアノ伴奏譜とともに紙上发表された。募集の要項が『朝日新聞』紙上に発表されたのが、同年11月27日であったから、歌曲の成立までに1ヶ月も要していないことがわかる。《皇軍大捷の歌》の普及にあたっては、レコード発表とラジオ放送だけでなく、レビューや歌謡ショーなど歌に関わるさまざまな芸能領域が活用された。

朝日新聞社の取り組みの特徴は、応募対象を楽曲制

定の目的に応じて臨機応変に変更していったことにあった。続く公募は、1938年2月15日が締切で実施された少国民向けの「さくらの歌」の作詞募集であった。これは、日独伊三国防共協定を記念して、東京市がイタリアとドイツに桜の苗木や種子を贈呈するイベントに呼応したものであった。さらに、同年10月9日、朝日新聞社は広く国民に対して、「皇軍将士に感謝の歌」の作詞募集を発表した。同月末の締切までに25,753編の応募があり、同年12月3日には、福田節の「父よあなたは強かった」の入選、橋本善三郎の「兵隊さんよありがとう」の佳作第一席が発表された。年明けから、曲譜の頒布が開始され、1939年1月20日には、日比谷公会堂において、朝日新聞社主催の「皇軍将士に感謝の歌発表会」が開催された。この発表会では、レコードの吹き込みを行った歌手による《父よあなたは強かった》と《兵隊さんよありがとう》の演奏と、作曲者自身による歌唱指導がなされた。同発表会は、大阪、京都、名古屋でも開催され、これらの歌曲は東京以外の大都市においても積極的な普及活動が展開されたのであった。

1940年に入っても、朝日新聞社は歌曲募集を展開していく。2月には、大日本防空協会との共催で、「防空の歌」の歌詞公募を発表した。「防空の歌」は、3月20日の締切までに、16,000余篇の応募が集まった。3月には、文部省、陸・海軍省の後援で、「興亜行進曲」の歌詞募集を実施し、29,521編の応募があった。6月5日には、今澤ふき子の作品の入選が発表されるとともに、作曲の募集も発表された。作曲には5,875編の応募があり、7月2日には入選作が発表されている。8月には、文部省、逓信省、陸・海軍省、帝国飛行協会の後援で、「航空日本の歌」の歌詞募集が実施された。「航空日本の歌」には、25,162編の応募があり、9月12日には、中川秀雄の入選と佐々木すぐるの作曲の《航空日本の歌》が発表されている。このように、アジア・太平洋戦争期に至るまでに、朝日新聞社はさかんに楽曲募集を展開していた。早いものでは、募集から作品の発表まで、つまり歌曲が完成するまでに1ヶ月程度のもが見られる。こうして、朝日新聞社は、内地において楽曲制作のノウハウを身に付けたのであった²³⁾。

このように時局に合わせて制作され、普及していった歌曲は「国民歌」と呼ばれるものである。戸ノ下は、「国民歌」を「国家目的に即応し国民教化動員や国策宣伝のために制定された『上から』の公的流行歌」と仮定している²⁴⁾。本稿は、そのような「国民歌」によ

る人民教化が試みられた様子を、日本軍政下のジャワに着目して見ていく。

3. ジャワにおける歌曲制作

1. 《八重潮》の成立過程

倉沢愛子によれば、1943年12月に成人向けの日本の歌を集めた本“*Seinen no Uta*” [青年の歌] が、宣伝部によってジャワで編集され出版されたという²⁵⁾。同書には、11曲が「インドネシア語訳」をつけて紹介されており、その中の1曲に「八重潮の歌」があった²⁶⁾。本章では、日本軍政下のジャワにおいて歌われた《八重潮》がいかんにして成立したか、順を追って見ていきたい。

1942年6月、うなばら社が『うなばら』紙面上において、「和唱歌」の歌詞を募集した²⁷⁾。この募集にあたっては、作曲と「馬來語」翻訳は宣伝班で行うことも決められていた。「和唱歌」の歌詞の応募締切は同年7月10日で、締切の2日前の紙面には、50篇超の応募が集まったことも報じられている²⁸⁾。同月27日には募集した歌詞の町田宣伝部長を筆頭に7名の囑託²⁹⁾による審査委員会が開催され、高第一七四七部隊榮留隊に所属する佐々木隆の「八重潮」が当選した³⁰⁾。当選作品は、1942年8月4日付『うなばら』紙上において発表されている。募集に際して「和唱歌」とされていたものの、同日付の『うなばら』紙上では、「唱和歌」とされている。「唱和歌」(「和唱歌」)は、日本人と現地の住民がともに歌うことを目的として募集され、ジャワ島の将兵から約100篇の歌が送られてきたという³¹⁾。ここで注目したいのは、日本人と現地の住民がともに歌う目的で募集されたのにもかかわらず、日本人(将兵)からの応募しかなかったことである。そして、当初計画されていた「馬來語」訳をやめ、大意のみを示して日本語で歌わせることとした³²⁾。佐々木隆の「八重潮」の現地語意識は、発表当日の『アジア・ラヤ』に掲載された³³⁾。『うなばら』紙上では、「この歌をひろく原住民に普及せしめる」ために、現地語訳をやめたこととされているため、歌を介して日本語の普及を図ろうとしていたこともうかがえる。

『うなばら』紙上における当選作「八重潮」の発表とともに、この歌詞に対して飯田信夫³⁴⁾が作曲を近く発表する予定であることも報じられた³⁵⁾。しかし、その2日後に一転し、「全島将兵諸氏ならびに原住民からも」作曲を募集することが発表されている³⁶⁾。作曲の募集に際しては、日本人将兵を読者層に持つ『うな

ばら』、現地の知識人を読者層に持つ『アジア・ラヤ』ともに、紙面には厳かな雰囲気曲調を求める旨が記されている。しかし、『アジア・ラヤ』においては、クロンチョンのような軽く楽しい曲調を求めており、現地住民にも楽曲応募への門戸を開いたかのように見える。『アジア・ラヤ』紙上において歌詞の意訳が示されているとはいえ、ジャワの住民たちが日本語の音に合わせて作曲をするには無理があるため、《八重潮》の作曲公募は、日本人を対象としたものであったのだろう。

作曲の公募に際して、『うなばら』紙上には選者によって一部修正された「八重汐—南方唱和の歌」の以下の歌詞が掲載された。

- 一、八重汐の遠つわだつみ、天照す神の国より
大きことかしこみまつり みいくさの船を
すゝめて はらからとこゝに集へり。
- 二、日の本はあじやの光、すめらぎの大御心を お
ろがめる民草われら、みんなみの椰子の島
より まことをば誓ひまつらん。
- 三、八重汐や幸の通ひ路、波寄せて湧く力の 新
らしき海原人ぞ、大いなるあじやを興す
みいくさにふるひ起たばや³⁷⁾。

佐々木による歌詞では、第1節中の「ひんがしの神の国より」とされていた箇所が、「大東亜戦争」の本義に鑑みるということで、「天照す神の国より」と修正されたのであった³⁸⁾。

作曲の応募締切は、1942年9月15日であったものの、どのくらいの応募があったのか、誰の作品が当選したのか、『うなばら』『アジア・ラヤ』において、管見の限り該当記事を見つけることができなかった。そのため、《八重潮》の作曲者は不明である³⁹⁾。完成した《八重潮》は、明治節である同年11月3日に、現地住民等約700名を招待した発表会において、発表されることとなった⁴⁰⁾。この発表会では、作詞当選者および作曲佳作等に対する賞品授与式も予定されていた⁴¹⁾ため、作曲の公募に対していくらかの応募があったことがうかがえる。

こうして、《八重潮》は明治節の発表会をもって、正式に発表されることとなった。この発表会に関しては1942年10月29日付の『うなばら』紙上において報道されたものの、現存する『うなばら』が同月31日のものまでであるため、実際に同年11月3日に発表会が開催されたかどうかは、同紙において確認することがで

譜例1 《八重潮》



* Finale NotePad 2012 を用いて作成した。

きない。しかし、摂南大学図書館に所蔵された「日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映画」第二巻に収録されている、NO.21 3-530「Jaesjio 八重潮」⁴²⁾がこの発表会の様子を撮影したものの映像であると考えられる⁴³⁾。この映画では、町田敬二宣伝部長、後のインドネシア初代大統領スカルノ Soekarnoの演説に続き、吹奏楽の伴奏によって現地住民が日本語の歌詞で《八重潮》を斉唱している様子が収録されている。「Jaesjio 八重潮」を視聴し、斉唱を五線譜に起こしたものが譜例1である。実際視聴してみると、半音下がった音程で聞き取れるものの、当時の大衆的な歌曲の調性として妥当であるC-durを採用し、譜面にした。

2. 《八重潮》の普及

1942年の明治節をもって発表された新歌曲《八重潮》は、同年12月14日頃から翌年1月6日頃までの間、ジャカルタ市内の劇場において、映画『八重潮—南方唱和の歌一』（以下、映画『八重潮』）を上映することによって普及していったと考えられる⁴⁴⁾。映画『八重潮』

は、軍政監部管理ジャワ映画公社によって、日本劇場、中央劇場、南映劇、銀星映劇、弥生映劇、新亜映劇、吾妻映劇、楽天地、新世界といった劇場で上映された⁴⁵⁾。映画『八重潮』は先述した、摂南大学図書館所蔵の「日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映画」に収録された「Jaesjio 八重潮」だと思われる。日本軍政下のジャワにおいては、映画が人民統治の手段として用いられていた⁴⁶⁾。「Jaesjio 八重潮」はいわゆるニュース映画の類で、かつ宣撫工作の手段として上映された短編映画の一つであると考えられる。そのため、1942年12月17日付『ジャワ新聞』の広告を見ると、新華においては、同月17日から20日の期間で「アルゼンチンの夜」「新しき翼」⁴⁷⁾「八重汐」、南海においては、同月16日から20日の期間で「血と砂」「八重汐」、月世界においては、同月16日から18日の期間で「有名な歌手」「八重汐」というように、映画『八重潮』は他の作品とともに上映されている。短時間のニュース映画である映画『八重潮』を通して、他の作品を目的に映画鑑賞に訪れた客に対して、新しく成立した《八

表1 映画『八重潮—南方唱和の歌—』の上映日程

上映日	上映館	同時上映作品	広告掲載日
広告のみ	日本劇場・中央映劇・南映劇・ 銀星映劇・弥生映劇・新亜映劇・ 吾妻映劇・楽天地・新世界	単独広告	1942.12.8
	同上	同上	1942.12.9
	同上	同上	1942.12.10
	同上	同上	1942.12.11
1942.12.14	新華	アダムの花	1942.12.16
1942.12.15	新華	アダムの花	1942.12.16
1942.12.16	新華	アダムの花	1942.12.16
	南海	血と砂	1942.12.16・1942.12.17 1942.12.18・1942.12.20
	月世界	有名な歌手	1942.12.16*・1942.12.17 1942.12.18
1942.12.17	南海	血と砂	1942.12.16・1942.12.17 1942.12.18
	月世界	有名な歌手	1942.12.16*・1942.12.17 1942.12.18・1942.12.20
	新華	アルゼンチンの夜 新しき翼	1942.12.17・1942.12.18 1942.12.20
1942.12.18	南海	血と砂	1942.12.16・1942.12.17 1942.12.18・1942.12.20
	月世界	有名な歌手	1942.12.16*・1942.12.17 1942.12.18
	新華	アルゼンチンの夜 新しき翼	1942.12.17・1942.12.18 1942.12.20
1942.12.19	南海	血と砂	1942.12.16・1942.12.17 1942.12.18・1942.12.20
	月世界	私の時間	1942.12.20・1942.12.21
1942.12.20	南海	血と砂	1942.12.16・1942.12.17 1942.12.18・1942.12.20
	新華	アルゼンチンの夜 新しき翼	1942.12.17・1942.12.18 1942.12.20
	月世界	私の時間	1942.12.20・1942.12.21
1942.12.21	月世界	私の時間	1942.12.20・1942.12.21
1942.12.31	八千代タナハン	後妻(馬來映画)	1943.1.1・1943.1.3 1943.1.5・1943.1.6
1943.1.6	八千代タナハン	後妻(馬來映画)	1943.1.1・1943.1.3 1943.1.5・1943.1.6

『ジャワ新聞』に掲載された広告より作成

- * 1942年12月16日付の紙面に掲載された広告中、「月世界」にて19日から18日まで「有名な歌手」「八重汐」と掲載されていた部分は誤植であると判断し、「月世界」にて16日から18日までの上映と修正した。
- 『南方軍政関係史料44 復刻版ジャワ新聞』第1巻において、1942年12月12日から14日(第5～7号)、同月19日(第11号)は欠落している。
 - 1943年1月2日は休刊、同4日(第27号)には映画の上映案内が掲載されていない。

重潮》を聴かせ、普及を図ったのであろう。

こうして、映画によって普及していった《八重潮》は、1943年に入るとさまざまな場面において歌われるようになる。1943年2月には、文教局囑託の武石公子によって作られた日本舞踊風の振付を、ジャカルタ市若葉女子技芸学校の現地住民生徒が熱心に習っている様子が伝えられた⁴⁸⁾。同年3月に軍政監部によって開催され、ジャワ全島の児童たちを対象とした日本語の会話と日本唱歌の競技会においては、《八重潮》が《日本》とともに合唱の課題曲とされた⁴⁹⁾。また、同年3月7日から9日にかけて開催された「新ジャワ芸能大会」のプログラムの冒頭では、《八重潮》が歌われた⁵⁰⁾。また、同年3月、ジャカルタの男子教員錬成所附属幼稚園の修業式においても、幼児らによって《八重潮》が歌われている⁵¹⁾。このように、《八重潮》という日本語の歌曲を現地の住民たちに歌わせることによって、日本語の普及を図ろうとしていたこともうかがえる。

しかし、《八重潮》の歌詞の意味が理解されないまま普及していったためか、さらには、歌詞の意味をも浸透させることを試みたのか、1943年1月及び5月には、『アジア・ラヤ』紙上で《八重潮》の翻訳懸賞が実施されている⁵²⁾。しかし、この翻訳懸賞の結果等は、『アジア・ラヤ』『ジャワ新聞』の紙面上では確認ができなかった。1月に実施されたものと同様の懸賞が5月に再び実施されているところを見ても、この懸賞が成立しなかったことも推察されよう。

3. 《八重潮》以降のジャワにおける歌曲制作

ジャワで日本人と現地の住民がともに歌うことができる「和唱歌」⁵³⁾の歌詞が募集され、「八重潮」が当選作となった。歌詞が決まった後、当初の計画を変更して、作曲の募集も行った。そうして、内地でさかんに実施されていた歌曲募集という方法によって、《八重潮》が成立した。広く一般に募集をして歌曲を制作するという方法は、戸ノ下の研究でも明らかにされているように、朝日新聞社が積極的に実施していた方法であった。ジャワにおいては、朝日新聞社が進出する以前、うなばら社による歌曲懸賞が実施されていた。しかし、内地での募集と比べ、「和唱歌」の応募作品はわずか100篇に過ぎなかった。内地と比べて応募主体が全体的に少ないだけでなく、現地の住民たちにとっては応募すること自体が困難であったことが指摘できる。そのため、朝日新聞社は新天地ジャワにおいて、歌曲募集で成立した歌曲を普及させるのではなく、ジ

ャワ新聞社の設立によって、当地において新作された歌曲の発信に携わっていくこととなる。

では、《八重潮》成立以降には、いかに歌曲制作が行われたのであろうか。

興亜祭記念事業としてジャワ・バルー（新爪哇）の歌をスマラン宣伝部主催の下に中部ジャワ一帯に募集したところ、ジャカルタ、スラバヤ方面よりも応募し、三百六十八の歌稿を得、審査員により優秀なものを選出した。近く飯田信夫氏に作曲を委嘱して一般に公開の運びとなれば「八重潮」と共に、原住民の作る歌として津々浦々で歌はれることであらう⁵⁴⁾

『ジャワ新聞』の記事によれば、現地住民から368の歌詞の応募があったと読み取れ、歌曲募集を行っていることがわかる。しかし、具体的にどのような歌の応募があったのか、また、実際に現地住民が歌を作ることができたのか、不明である。同年9月には、現地の住民から募集した「新民族歌曲」が選定されたことが、内地で刊行されていた『音楽文化新聞』において伝えられている。

【ジャカルタ発同盟】ジャワ現地住民文化の指導に当つてゐる啓民文化指導所では従来の敵性音楽を駆逐し新生ジャワ建設の意欲を盛りあげた健全音楽の確立を期するため、今春以来一般現地住民から作詩作曲を募集してゐたが「米英撃滅行進曲」「アジアの力」「進めインドネシア」「新女性の希望」「新女性」「民族の希望青年」等の優秀作品廿数篇が選定された、啓民文化指導所では士気昂揚の音楽の設立、普及と並行して団歌、大衆唱歌の歌を制定することになつてゐる〔以下、略〕⁵⁵⁾

「今春以来一般現地住民から作詞作曲を募集」とあり、前述の「ジャワ・バルー（新爪哇）の歌」を指している可能性もある。つまり、《八重潮》をきっかけとして、募集によっていくらかの新作歌曲が誕生したのであった。しかし、史料中にあるように、啓民文化指導所が士気昂揚のための音楽を成立させ、大衆が歌うことができる歌を制定していくこととなる⁵⁶⁾。つまり、日本軍がジャワの人民統治において歌を利用するにあたり、現地の住民が歌うことができる新たな歌曲を制作するためには、内地で実施した歌曲募集のように、一般住民に募集したうえで制作するには、間に合わなかったのである。一般に募集をして歌曲を制作するとい

うスタイルを定着させるよりも、啓民文化指導所音楽部内で音楽的能力のある現地スタッフを指導し、同文学部より歌詞の提供を受けて、新作歌曲を制作する方が効率がよいということに気が付いたのであろう。そうして、啓民文化指導所が制作した歌曲は、1943年末より1944年にかけて『ジャワ・バル』に掲載され、現地の住民に発信されていくのである。

1944年には、軍政監部によって制定された「国民学校の歌」として、『ジャワ・バル』に《東亜のよい子ども》《海路はるかに》の2曲の譜面が掲載された⁵⁷⁾。これら「国民学校の歌」は、ジャワの国民学校で歌われる歌として、歌詞の懸賞を実施したところ、日本・インドネシア合わせて832の応募があったという⁵⁸⁾。『ジャワ・バル』に掲載された譜面には、日本語の歌詞が示されており、作詞者の氏名を見ても、当選した2作品は日本人の作品であると思われる⁵⁹⁾。832編の内訳が明らかでないものの、表立っては日本人と現地の住民に対して広く公募をしても、実質的には公募自体は日本人向けのものだったのではないだろうか。

まとめ

1. 日本軍政下のジャワにおける歌曲制作

戦時期の音楽、とりわけ歌詞をともなう歌は、国威発揚や民心教化の手段とされた。いわゆる南方地域においても、人民統治に際して歌が用いられてきたのは、従来の研究においても指摘されているところである。広く民衆に対して歌曲の募集をし、当選した歌曲を普及させるというのは、民衆参加型のイベントとして内地においては受け入れられ、歌に読み込んだテーマを普及させるのに、効果的に機能した。その歌曲募集という方法が、日本が占領したジャワの地でも実施され、《八重潮》が誕生した。《八重潮》は日本語の歌詞を募集しているところから見ても、日本人を対象とした公募であった。歌詞に続いて作曲の公募を実施しても、作曲の技能を持ち合わせている人物が限られていることを考えると、《八重潮》の公募はやはり日本人を対象としたものであったといわざるをえない。また、《八重潮》の成立過程を見ると、まず、歌詞を募集して、その当選作に対して、改めて作曲を募集している。歌詞の募集開始が1942年6月、当選した歌詞の発表が同年8月、翌月には作曲作品の締切、新作歌曲《八重潮》の発表は同年11月3日であったため、歌曲の制作に5ヶ月近くを要していることになる。これは、歌曲の発

表の時期を明治節に合わせたと考えると、内地での楽曲募集よりも完成までに時間を要し、新作歌曲の成立に困難を伴っていることが推察される。

朝日新聞社は、公募による歌曲制作に関しては、内地において豊富な経験を有していた。その経験を活かし、新天地ジャワにおいても歌曲募集を試みることは十分に考えられる。先述したように、内地で朝日新聞社が実施した歌曲募集は、歌詞募集から作曲までの過程に、早いものでは1ヶ月程しか要していない。しかし、《八重潮》の成立過程を踏まえ、ジャワでの歌曲募集は一筋縄ではいかないと判断したのではないだろうか。そこで、プロパガンダのテーマを読み込んだ歌曲をコンスタントに発信していくためには、専門家によって制作していく方が得策だと考えられたのであろう。啓民文化指導所音楽部においては、飯田信夫の指導のもと、音楽の素養のある現地スタッフによって、現地語の新作歌曲が作られていくこととなる。それらの歌曲は、『ジャワ・バル』に掲載されることにより、発信されていくのである⁶⁰⁾。

2. おわりに

本稿では、ジャワにおける人民統治の手段として、公募によって新作された《八重潮》に着目して、当該地の歌曲制作について検討してきた。ジャワにおいては、現地の人々が歌う歌曲を一般公募によって制作すると時間を要するため、多くの歌曲を制作していくことは困難であるという問題に直面した。その要因の一つとして、内地の人々と比べて、ジャワの住民たちが楽曲募集という形態に馴染みがなかったことも指摘できるであろう。当時のジャワは識字率が低く、現地の住民たちの多くは、歌詞を作成して応募することが困難であった。ジャワにおいて、新たに歌曲を制作するためには、音楽的素養のあるものが主導していく必要があったのである。1943年4月に設立された啓民文化指導所は、歌曲制作を担い、音楽部に配属されていた飯田信夫とともに、現地語の新作歌曲の制作に尽力することとなった。

《八重潮》については、映画の上映や各地で演奏されている様子を追うことによって、ある程度普及したことが見て取れた。今後は、当時制作された他の歌曲が、いかにジャワの住民に浸透していったのかを調査し、日本軍政下のジャワにおける音楽状況のさらなる解明を目指したい。

【注】

- 1) 倉沢愛子「日本軍政下のジャワにおける映画工作」『東南アジア—歴史と文化—』山川出版社、1989年、同『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社、1992年、第6章「宣撫工作」。
- 2) 丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌—グラフ雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』を素材に—」『立命館大学人文科学研究紀要』第107号、2016年、25~48頁。
- 3) 管見の限り、前掲、倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』の第6章「宣撫工作」において、「歌」について言及されているのみである。
- 4) 戸ノ下達也『越境する近代5 音楽を動員せよ 統制と娯楽の十五年戦争』、青弓社、2008年、第4章「量産された『国民歌』—アジア・太平洋戦争期の楽曲募集」、同『『国民歌』を唱和した時代 昭和の大衆歌謡』、吉川弘文館、2010年。なお、楽曲募集については、倉田喜弘『日本レコード文化史』（東京書籍、1992年）、同『『はやり歌』の考古学—開国から戦後復興まで』（文藝春秋、2001年）等でも言及されている。
- 5) 新聞社による音楽作品の募集に関する研究として、小川博司・木村篤子「戦前における新聞社の音楽文化事業」（津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館出版、1996年）、津金澤聰廣「メディア・イベントとしての軍歌・軍国歌謡」（青木保・川本三郎・筒井清忠・御厨貴・山折哲雄編『近代日本文化論10 戦争と軍隊』岩波書店、1999年）等が挙げられる。
- 6) 『うなばら』の書誌情報については、後藤乾一・木村一信解題『南方軍政関係史料12 赤道報・うなばら』（龍溪書舎、1993年）所収、後藤乾一「解題（一）ジャワにおける初期日本軍政と『赤道報』『うなばら』」、木村一信「解題（二）『赤道報』『うなばら』の文芸関係記事について—その概要と特質—」を参考にした。
- 7) 「ジャワ島における新聞現状（帰還特派員報告）」（朝日新聞社社内資料、年月日不明）。同史料によれば、『うなばら』は部隊に無償で配布されていた。しかし、「バタビヤ坪田支局長より」（朝日新聞社社内資料、1942年8月28日）によれば、1942年9月1日より、『うなばら』を1部1円で軍に売るという決定がなされている。そのため、「ジャワ島における新聞現状（帰還特派員報告）」は同年8月28日以前のもと考えられ、『うなばら』の発行部数も同年9月以降は変化した可能性がある。
- 8) 前掲、後藤乾一・木村一信解題『南方軍政関係史料12 赤道報・うなばら』には、1942年3月9日~同年10月31日に刊行された、『赤道報』『赤道報壁新聞』『うなばら』の第1号~第200号が収録されており、それ以降は現存していない。
- 9) ジャワ新聞社は、朝日新聞社が1942年12月8日に設立した新聞社である。
- 10) 木村一信「『ジャワ新聞』復刻版刊行にあたって」、木村一信解題『南方軍政関係史料44 復刻版ジャワ新聞』第1巻、龍溪書舎、2013年。
- 11) 「南方新聞業務状況 十一月十日 南方局」（朝日新聞社社内資料）。なお、この発行部数は1943年8月31日のものである。
- 12) 本研究で用いた『南方軍政関係史料44 復刻版ジャワ新聞』第1巻には、1942年12月8日から1943年3月31日の紙面が収録されている。
- 13) 宣伝班期の *Asia Raya* は、同紙一面に論説委員として、富澤有為男、浅野晃、清水宣雄の三氏、名誉委員としてスカルジョ R. Soekardjo Wirjopranoto、編集委員長として、市来竜夫（ごくわずか関与し、後に名前だけの存在となる）、一般・政治部門の編集委員として、ウィナルノ Winarno、社会・青年部門編集委員としてサムスディン Mr. R. Samsudin、文化部門編集委員としてサヌシ・パネ Sanoesi Pane、経済部門編集委員としてスジョソ Setijosjo の名前が挙げられている。なお、文化部門編集委員の役職は、1942年7月4日に消えることとなり、それと同時にサヌシ・パネも *Asia Raya* から手を引くこととなる。一方で、朝日新聞社（ジャワ新聞社）時代では、スカルジョがアジア・ラヤ社社長、ウィナルノが編集委員長として一面に名を連ねている。
- 14) 前掲、「ジャワ島における新聞現状（帰還特派員報告）」。
- 15) 京都大学東南アジア研究所図書館室のマイクロフィルムは、1945年9月7日の1面までとなっている。
- 16) 前掲、「南方新聞業務状況 十一月十日 南方局」によれば、1943年8月15日刊行の第16号の発行部数は23,406部であった。なお、同史料では、「8月16日発行」とされている。
- 17) 前掲、丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌—グラフ雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』を素材に—」。
- 18) 倉沢愛子解題『シンジャワ』2603年1月号~2605年8月号、龍溪書舎、1992年。
- 19) 前掲、戸ノ下達也『音楽を動員せよ』、第4章「量産された『国民歌』—アジア・太平洋戦争期の楽曲募集」150頁。
- 20) 同151~152頁。また、作曲の委嘱については、作曲家個人への委嘱、レコード会社に委嘱され会社が専属作曲家に依頼、レコード会社に委嘱され会社が専属作曲家を対象に社内公募、東京音楽学校に委嘱、軍楽隊に委嘱、音楽団体に委嘱、といったパターンがあった（同152頁）。
- 21) 大阪朝日新聞社・東京朝日新聞社と大阪毎日新聞社・東京日日新聞社は、ともに1932年2月28日付朝刊で、三勇士の

楽曲募集を発表した。工兵3名の軍国美談は、新聞・出版社だけでなく、映画・演劇・寄席業界から教科書まで巻き込んだ一大イベントとして演出されていったという(前掲、津金澤聰廣「メディア・イベントとしての軍歌・軍国歌謡」、『戦争と軍隊』75頁)。

- 22) 前掲、戸ノ下達也『「国民歌」を唱和した時代 昭和の大衆歌謡』では、「皇軍大捷の歌」募集の経緯について、「この募集は、日本軍の南京攻略までの武力行使の正当化と国民の士気高揚を目的としたものであった。盧溝橋事件後の陸軍は、停戦協定が成立していたにもかかわらず、華北分離政策を実現させるべく内地や関東軍、朝鮮派遣軍から増援を行い、北京、天津、上海を占領、同時に海軍による南京空襲が開始され戦火が一気に拡大した。参謀本部の正式な南京攻略の命令は12月1日であったが、この楽曲募集は、すでにそれ以前から国内世論が南京攻略を当然の成り行きとして認識されていること(『「国民歌」を唱和した時代 昭和の大衆歌謡』88~89頁)。
- 23) 朝日新聞社は、日米開戦時になると、公募ではなく委嘱して創作した楽曲を献納という形で公にするようになる(前掲、戸ノ下達也『「国民歌」を唱和した時代 昭和の大衆歌謡』153頁)。
- 24) それは、当時内務省で流行歌の検閲を担当していた小川近五郎や、音楽評論家の吉本明光が示した「国民歌」の枠組みをより厳密にしたものである(前掲、戸ノ下達也『「国民歌」を唱和した時代 昭和の大衆歌謡』58頁)。
- 25) 前掲、倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』、292頁。“*Seinen no Uta*”は未確認であり、今後の現地調査が必要である。
- 26) 前掲、倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』、293頁。
- 27) 『うなばら』第83号、1942年6月16日、2面。
- 28) 同第102号、1942年7月8日、2面。
- 29) 同第125号(1942年8月4日、2面)には、囑託7名の姓のみ記されている。ここで記されていた7名の囑託は、大木惇夫、浅野晃、富澤有為男、北原武夫、市来竜夫、飯田信夫、中谷義男のことであろう。なお、史料中に記された「市川」は「市来」の誤記と思われる。
- 30) 同第125号、1942年8月4日、2面。なお、紙面上には「八重汐」と表記されていた。
- 31) 同第125号、1942年8月4日、2面。
- 32) 同前。
- 33) 『アジア・ラヤ』1942年8月4日、2面。同紙では現地語訳をしない理由として、「インドネシアの兄弟たちに容易に歌ってもらえるような歌詞の方がよく、インドネシア語に翻訳すべきである。しかし、翻訳が難しいためこの要望

を充たせなかった。古代の美しい日本語で書かれた歌詞は大変翻訳するのが難しく、さらに、もし翻訳されても、それ本来の美しさが消えてしまう心配がある。そこで、インドネシア人にもこの歌詞を日本語のまま歌ってもらうことに決定した(和訳：織田)と説明されている。当時のインドネシア語がどの言語を指すのかについては、本稿での言及は避けたい。ここでは、同紙の記事における「dalam bahasa indonesia」を「インドネシア語」と直訳した。

- 34) 『音楽年鑑』(大日本音楽協会編纂、共益商社、昭和15年度版110頁、昭和16年度版120頁、昭和17年度版133頁)によれば、東京大学工学部出身で、ピクチャー専属の作曲家であった。代表曲に『隣組の歌』がある。1943年4月以降、ジャワにおいて啓民文化指導所音楽部の委員として、同地において歌曲制作に携わる。
- 35) 『うなばら』第125号、1942年8月4日、2面、『アジア・ラヤ』1942年8月4日、2面。
- 36) 『うなばら』第127号、1942年8月6日、2面、『アジア・ラヤ』1942年8月6日、1面。『アジア・ラヤ』においては、飯田信夫が選定者である旨が明記されている。
- 37) 『うなばら』第127号、1942年8月6日、2面。1番は日本からの呼びかけ、2番はインドネシア(ジャワ)からの応答、3番が両民族の合唱という構成になっている(前掲、倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』584頁[292頁の注釈])。
- 38) 『うなばら』第127号、1942年8月6日。
- 39) 前掲、倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』では、作曲は軍楽隊によるとされているものの、典拠は不明である(584頁[292頁の注釈])。
- 40) 『うなばら』第198号、1942年10月29日、2面。発表会では、磯田隊長指揮による治部隊軍楽隊の初演奏が予定されており、日本及び現地の女性も参加することとなっていた。
- 41) 『うなばら』第198号、1942年10月29日。
- 42) 『摂南大学図書館所蔵『日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映画』目録』(<http://www.setsunan.ac.jp/~tosho/indonesia/indonesiamenu.htm>)において、オランダ国家情報局が管理する映画フィルムから複製したビデオテープの内容を検索することができる(最終閲覧日 2016年9月21日)。
- 43) 『摂南大学図書館所蔵『日本軍政下のインドネシアにおいて上映された映画』目録』では、「Jaesjio 八重潮」は「南方唱和の歌、八重潮の歌のインドネシア語歌詞を募集し、入選作を決定した時の発表会の様子」とされている(www.setsunan.ac.jp/~tosho/indonesia/indonesia2-21.htm 最終閲覧日 2016年9月21日)。しかし、映像の内容は《八重潮》が日本語歌詞で歌われるもので、現地語の歌詞について言

及されていなかった。

- 44) 映画『八重潮—南方唱和の歌—』の上映期間は、『ジャワ新聞』1942年12月8日から1943年1月6日に掲載された広告から判断した。
- 45) 『ジャワ新聞』1942年12月8日・9日・10日・11日に掲載された広告による。なお、『ジャワ新聞』の発行日は和暦で表記されているものの、本稿では西暦に統一して表記した。
- 46) 前掲、倉沢愛子「日本軍政下のジャワにおける映画工作」『東南アジア—歴史と文化—』、同『日本占領下のジャワ農村の変容』第6章「宣撫工作」。
- 47) 1942年12月17日付『ジャワ新聞』では「新しき翼」と表記されていたものの、1942年12月20日付『ジャワ新聞』の上映案内をはじめ前後に掲載された広告等では「新しき翼」とされているため、本文中は誤記を修正して表記した。
- 48) 『ジャワ新聞』第57号、1943年2月3日、2面。同紙の記事には、日の丸を振って「日本舞踊八重汐の猛稽古」をする現地住民生徒の写真が掲載されている。
- 49) 『ジャワ新聞』第79号、1943年2月25日、2面。同紙の記事では、ジャワ全島各地から児童が集まるこの機会に、多くの文化施設を見学させて、軍政の意図を認識させたい旨も記されている。
- 50) 『ジャワ新聞』第85号、1943年3月3日、2面。新ジャワ芸能大会は、1943年3月7日・8日・9日の3日間、毎日午後8時から3時間、ジャカルタ市立劇場で開催され、1日目は現地住民の招待日、2日目は軍人・軍属の招待日、3日目は一般邦人の招待日とされた。同第91号（1943年3月9日、2面）によれば、「中央病院の看護婦さんたち」によってその他の童謡とともに、『八重潮』が披露されており、冒頭のみならず『八重潮』が歌われた可能性がある。
- 51) 『ジャワ新聞』第96号、1943年3月14日、2面。
- 52) 『アジア・ラヤ』1943年1月13日、2面、同年5月4日、2面。
- 53) 前述したように、1942年6月16日付『うなばら』紙上で歌詞を募集した「和唱歌」は、同年8月4日付同紙には、「唱和歌」とされ、当選作品が発表されている。
- 54) 『ジャワ新聞』第33号、1943年1月10日、2面。
- 55) 「新民族歌曲を制定 ジャワで住民から作詞作曲を募集」『音楽文化新聞』第59号、1943年9月10日。
- 56) 啓民文化指導所が現地語の新作歌曲を制作したことについては、前掲、丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌—グラフ雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』を素材に一」に詳述した。
- 57) 『ジャワ・バル』第4号、1944年2月15日、33頁。
- 58) 同前。

- 59) 《東亜のよい子ども》は「さちよ おかだ」、《海路はるかに》は「かく かつやま」の歌詞が選ばれた。『ジャワ・バル』第6号（1944年3月15日）、第7号（1944年4月1日）には、各曲の五線譜とともに、女子教員錬成所の教員たちによる踊りの振付も掲載されている（前掲、丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌—グラフ雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』を素材に一」）。前掲、倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』では、『東亜のよい子ども』が紹介されており（350頁）、日本本国よりも占領地の子どもたちに「東亜」の一員としての帰属意識を植え付けるために歌わせたものだと説明している（584頁 [293頁の注釈]）。
- 60) 前掲、丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌—グラフ雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』を素材に一」。

凡例：本稿における引用史料中の旧字体は、原則新字体に改めた。

《付記》

本稿は、立命館大学国際平和ミュージアム第1回メディア資料研究会（2016年5月20日）における報告内容を再構成し、加筆・修正したものである。